
ミッシング・リンク 【アナザーストーリー】

密 麻容

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミッシング・リンク 【アナザーストーリー】

【Nコード】

N6439E

【作者名】

密 麻容

【あらすじ】

ミッシング・リンクの平行話です。高校二年ですべてが終わる。そう決められていた運命だった。妙なカリスマを持った神威葵を中心に、見えない繋がりで出会いが繰り返されていた。クラスメイトの浅葱、浅葱の兄の睦月、二人の幼馴染みの御影。そして、文化祭で出会った蛍と夜宵。偶然を装って、必然的に出会う。その出会いを結ぶように現れる歩と泉里。時折聞こえるパチンと鳴る音。運命は動き出していた。

1 神威 葵（カムイ アオイ）

普通の高校二年生。見た目はその一言で尽きるが、彼の環境は違っていた。

入学式が終わって、クラスですぐに決められるクラス委員長。立候補はなく、教師の推薦もなかった。その中で投票した結果、圧倒的多数で一人の男子が選ばれた。

神威葵。かむいあおい その名前を初めて聞いた者も多い。しかし、当然のように選ばれる。まるで、予め決まっていたかのように。そんなことが、何度も続いていた。

夜空が光り、歓声が響いた。前夜祭が始まった。実質、文化祭の開始だった。

教室から校庭を眺めていたが、無事花火が上がったのを見届けてから机に突っ伏した。クラス委員長は文化祭でのクラス代表を兼ねるため、ここ一週間ほど準備で疲弊していた。腕に巻かれた『執行委員』の腕章は、選ばれた者の印であり、僕にとっては煩わしいものだった。

前夜祭には参加せず、腕章を乱暴に取り払った。

「イインチヨウ、居眠り？」

澄んだ声が気配もなく近付いた。委員長、と呼ばれ、机の上に頭を置いたまま目を声の方へと向けた。

呼んだ人物はわかっている。中学が同じで、同じクラスになった中学二年から一緒にいることが多かった。唯一、親友と呼べる友人だった。

思いの外近くにいた十夜は、隣の机に腰掛けた。

「居眠り…かな。眠れてない気がするけどね」

頭を動かした。ごり、と嫌な音がした。

腕を枕代わりにせず、そのまま頭を机に乗せている。偽物に見える木の板は、癒し効果を感じなかった。いつからあるのか、机には意味のない落書きが見て取れる。それが一層気分を落ち込ませた。机の脚はプラスチックで、木とプラスチックの組み合わせも謎だった。

思考を振り切り、背を丸めた姿勢から起き上がり、手を伸ばして背筋を伸ばした。

「眠っちゃいけない気がする。夜寝てても、本当の眠りじゃない気がする」

「それって病気？ 委員長の仕事が負担、とか」

「病気じゃないよ。体は『睡眠』でちゃんと休んでる」

肩に手を当てて腕を回した。心身ともに異常はない。しかし、違和感が残った。脳の奥が、本能のように、眠りを拒絶している気がする。

「花の香りで癒されてみたら？」

自然な動きで顔の前に差し出されたのは、白い花だった。誰でも知っている花。最近よく目にするその花は、担任教師が持ってきて教室に生けてあったチューリップだった。

「花、ね」

差し出されたチューリップを受け取り、茎を持ってペン回しのように一回転させて手元にあった開いた本の上に置いた。

活字に浮かぶ白い花。勢いよく本を閉じた。

「葵ー？ 嫌がらせか？」

「押し花代わり。ただ枯らすより、この方が良いかなくて」

花がどうなったか、確かめなかった。無惨に潰れているのは想像できる。ただ、花がそこにあるということが重要だった。本の間にあると思うだけで、花は存在し続ける。記憶の中で、いつまで経っても朽ちることはない。

「さて、と。明日は運営委員が仕切ってくれるし、クラスのは当番から外されてる。十夜、一緒に回らない？」

「当番免除はご褒美ってことか？ そうだな、一緒に回ろうか」

十夜も当日は自由だということは本人から聞いていた。僕の当番免除は偶然だったか。

十夜のクラスは劇を行う。クラスの催し物を劇にすると決定したのは十夜が主役なることを期待したからだだった。美形、という表現が一番単純でわかりやすく、昨年の校内美形ランキングでは四位に入った、誰もが認める、主役にふさわしい十夜。

しかし、十夜はあっさりと断った。

「台詞を覚えるのが嫌。得意分野で協力するのがクラス行事ってものだと思わないか？」

につこりと作られた笑顔にクラスメイトは負け、十夜は得意分野の衣装担当となって衣装を三着作っていた。レンタルよりも安く、古着屋よりも質が良い衣装は、十夜が主役にならなかった代償としては十分だった。

「十夜って、創作全般得意だよな」

「似ているモノを作るのはな。まあ、『創司』だし？」

軽く笑った十夜の言葉に引っ掛かった。

創司。その単語は十夜の名字というだけでなく、意味があるような気がした。何かと密接に関係している。チクリ、と頭が痛んだ。その痛みを隠し、十夜に向かって「そうだね」とだけ答えた。

隣を歩く十夜は、何故か他校の制服を着ていた。

午前九時から、文化祭は始まった。今日は『執行委員』の腕章を外し、一般生徒を装っている。実際、執行委員は当日は自由行動で、運営委員か実行委員が対処することになっている。しかし、外部参加者に区別はつきにくく、腕章を着けていることで文化祭の関係者だとして話しかけられることがある。それは、昨年の文化祭で体験していた。

十夜は今年の人気ランキングに名前が載り、昨年より順位が上がって三位になった。校内、ということから、ここの生徒に限る。他

校の制服は、人気ランキング三位の『創司十夜』を隠していた。
同じことだった。煩わしかった腕章が消えた左腕を見て、笑みが漏れた。

「自由になったって感じがする。さあ、どこに行く？」

「美術部の展示に行ってもいいか？」

「おっけ。由使^{ゆし}くんの展示が気になるんだね？」

疑問ではなく、確認だった。

『由使くん』は双子だった。だった、というのは、今年の夏、兄が不慮の事故で死んだからだ。弟は今、入院している。

去年は十夜と一緒に回れず、執行委員とクラスの出店で自由時間はなかった。差し入れとして出店の商品は食べたが、展示や劇などは全く見に行けず、今年は楽しみにしていた。去年の文化祭で浅葱^{あさぎ}の作品を見た十夜は、暫くその場を動けなかった、と言っていたのを覚えている。去年は見逃したが、今年は。

美術部の展示室に入って、視線が固定した。隣で十夜の感嘆の溜息が聞こえた。

「由使の作品だ」

入院する前に作っていた作品で、未完成だということだったが、これはこれで良いと思った。

見学者はまだいない。『由使浅葱』と書かれた、題名のないその作品から離れられなかった。

「青い鳥、だな」

「青い鳥ってあの幸せの青い鳥かな？」

目線は鳥から動かさないで、隣に並んだ十夜に訊いた。

青い鳥で思い出すのは童話だ。『幸せを運ぶ鳥』という夢みたいな存在は、現実にはないのかもしれない。けれど、夢を見ていたかった。サンタクロースだって世界のどこかに存在するのかもしれない。

『夢のあるモノ』を肯定しないが、否定もせずに心に留めておいていた。あったらいいのに。その存在を、心の中に存在させている。

「青い鳥が全部『幸せの青い鳥』だとは限らない。いや、『幸せの青い鳥』はいないのかもしれない。でも…今はこの鳥が『幸せの青い鳥』であってほしいと思うな」

強い気持ちを込めた十夜の声に、微笑が漏れた。同じ気持ちだった。感じ方が似ているから、同じであることが多いから、隣にいることが不愉快ではない。

青い鳥は頭上で羽を広げている。導くように。見ていると、望んでいたモノが現実になるかも知れないという期待が湧いてくる。

「葵：あれ」

何かがゆつくりと落ちてくる。それは鳥の羽根だった。空の色によく似た青が、自分に向かって落ちてくる。

十夜はふわりと落ちてくる羽根を軽く跳んで左手で素早く取り、こちらへ向けた。

「幸せの青い鳥だったみたいだ。ほら、こんなにも嬉しい気持ちにさせてくれる」

「うん」

はい、と差し出された羽を受け取り、くるくると回した。その羽は本物の鳥の羽にインクで着色してあった。花と同じで、朽ちていくものだ。それなら、とショルダーバックの中に入れてあった本を取り出し、羽を挟んだ。同じ本の中にチューリップと羽が存在している。まるで宝箱のようだった。

「創司^{そせい}十夜さん：昨年もここで会いましたよね？」

「名前：ランキングを見たのか。ああ、昨年も由使の作品の前で会ったな」

いつのまに人が居たのか、呟きで振り返った。

柔らかい笑みを浮かべた少女。知っている気がした。しかし、既視感はずぐに消えた。

パチン、と遠くで鳴った音が聞こえた。

少女と十夜は知り合いというよりも同士、という雰囲気だった。昨年の文化祭で会った人を覚えているなんて、それは特別だという

ことで。

「私は時合歩じあひあゆむです。歩で結構ですよ。浅葱の友人です」
歩。また、チクリと刺すような痛みを感じた。頭が、脳が。

「僕は神威葵。浅葱くんのクラスメイトだよ」

浅葱くん、と言っのが不自然に感じた。ただのクラスメイトのはずなのに。創司、歩、浅葱。その名前が、違和感を伴ってぐるぐると頭の中を回っていた。

「神威さん…浅葱が参加するはずだった地学部合同発表が今日あるということなんですが、知ってますか？」

「うん、化学室でやるって書いてあったよ」

鞆からパンフレットを取り出し、歩に渡した。一応『執行委員』。パンフレットは五部持たされていた。

文化祭実行委員会の会議で話されていた内容は、確か近隣の学校と合同でプチ・プラネタリウムを作り、部員が星座の解説をするというものだった。暗幕の貸し出しが多かったため、よく覚えている。暗幕に市販されているプラネタリウムで星座を映し出すらしい。三校合同ということで、それ以外にも何か企画しているようだった。

浅葱が所属しているのは美術部だけではなくあったようだ。この学校に地学部はない。化学・生物・地学部が部員不足のために『生活科学部』として一つになった。今回は地学部として、文化祭に参加している。ついでに、この学校は三校の中で一番住宅から離れた学校なので、文化祭の後に天体観測を行なうと会議で言っていた。後夜祭が終わった後なら、今日の天気では綺麗な星空が見えるだろう。

「歩、待った？」

「蛍。時間通りですよ」

歩の視線を追った先にいたのは。

同じ顔の少年だった。

2 夜月 蛭（ヤゲツ ケイ）

世界には自分と同じ顔が二人いる。それが本当だとは思わなかった。しかし、出逢った。

『似ている』ではなく『そっくり』な、一卵性の双子のように同じ顔。すでに一人出逢っていたけど、もう一人出逢うとは思わなかった。以前出逢った『彼』より、強く、何かを感じた。
「そっくりだな」

『そっくりさん』の隣にいた美形が笑った。確か、『美形ランキング』の三位に入っていた人だ。他校の制服、僕の高校の制服を着ているけど、その人だとわかった。氏名は読めない名字で、名前は『十夜』と書かれていたのをしつかりと思い出した。

十夜の笑い声に緊張が解けたのか、『そっくりさん』は柔らかい笑みを浮かべた。同じ顔なのに、自分では作れない表情。それが、『何か』を強くした。

パチンツ。どこかで指が鳴る音が鮮明に聞こえた。

「ほんとに。僕は神威葵。よろしく、ケイクン？」

「蛭でいい。『蛭』で、ケイ。夜月^{やげつ}蛭です、よろしく葵、十夜」

上手く笑えたか自信がなかった。葵。どこかで聞いたことがある気がした。鎖骨がジクジクと痛む。痛みが、何かを呼び起こそうとしている。歩と出逢ったときに感じた痛みに似ていた。

葵は「ランキングってすごいね」と苦い顔をした十夜と笑っていた。このまま話していたかったけど、時計の針は集合時間の五分前を刺していた。

「歩、海^{かいり}里は先に化学室に行ってるから」

「わかりました。では、行きましょうか」

「僕も一緒に行っていく？」

歩と並んで教室を出ようとしたところでかかった声。断る理由はなかった。歩を窺うと、いつもの笑みを浮かべていた。

「うん、見ていってよ。合同発表で、結構凝った作りになってるから」

「あ、もうお客入ってたんだ」

ドアを開けると、並べた椅子の半数が埋まっていた。飲食禁止にしていたが、部員が配る金平糖は例外で。でも、噛み砕くのは禁止。まだ椅子に座っていない人は、展示物を見て回っていた。惑星をボールで比較した模型、星空の写真、クラスメイトの占い師の母親に協力してもらって作った星占い。葵たちが展示物を見て回っているのを歩と待っていた。

「すごいね。生活科学部に入ろうか迷ってたんだけど、入ろうかなって思ったよ」

「是非入ってよ。来年は一緒にやろう!」

金平糖を手渡すと、葵は嬉しそうに笑い、十夜は苦笑した。なんとなく、二人との距離が縮まった気がした。

楽しそうに金平糖を食べながら待っている客を横目に、準備スペースへ暗幕を開けて入った。

「蛭、遅い…って蛭？」

「初めまして。執行委員の神威葵です。こっちは創司十夜です」

驚いている海里に、葵は自己紹介と十夜の紹介をした。あ、執行委員だったんだ。

「俺は輝流海里。合同発表の参加者です」

「海里、緊張しているんですか？ では、仲良くなる第一歩として名前で呼び合いませんか？」

歩の提案に皆頷いた。名前で呼ぶのが自然に感じる。葵、歩、ここにはいない浅葱。この名前は名前で呼んでいた気がした。ずっと昔に。鎖骨の痛みが増した。思わず手で押さえた。

「あ、みんな揃ってる」

「時間通りだよ、夜宵やゆう」

暗幕を開けて現れたのは、同じ顔の、違う制服を着た夜宵だった。

3 筑紫 夜宵（ツクシ ヤヨイ）

「夜宵、冥里。今日はよろしく」

同じ顔の少年、蛍はにつこり笑った。この合同発表で出逢った同じ顔。隣にもう一人、同じ顔の人がいたことに、特に驚かなかった。なんとなく、もう一人居る気がしていた。

「うわーまた夜宵とそっくりな人ー。と、ランキングの人だね。初めまして、まゆずみ 冥里です」

「筑紫夜宵です。今日はよろしくお願いします」

「執行委員の神威葵と、ランキング三位の創司十夜です。あ、歩の提案で名前で呼び合おうってことになったんだけど、それでいい？」

冥里と同時に頷いた。葵。声に出さずに口の中で呟いた。葵。耳から離れなかった。同じ顔であることが関係しているような気がする。鎖骨が、ジクジクと痛んだ。蛍も同じ箇所を手で押さえている。もしかして、同じように痛んでいるのか。

当の葵は隣の十夜と金平糖を見て笑っていた。金平糖の配布は僕と蛍のアイディアだった。星にはやっぱり金平糖だろう、と。

「では、時間になりましたので、始めますね。まずは私からナレーションします」

浅葱の代役で参加した歩は、初めから部員だったように思えるほど自然に溶け込んでいた。浅葱が入院してから、浅葱の幼馴染みに代役として紹介された歩はどこかで逢った気がして。でも、重なる顔はなかった。一度逢ったら忘れないくらい、歩は印象に残る雰囲気を持っていた。

出口の近くにいた海里が蛍光灯のスイッチを押した。同時に蛍がプラネタリウムの電源を入れる。

黒い布をかぶせた空に硝子を散りばめたような星。一つ一つが意思を持っているかのように感じた。準備スペースの外で歩は解説を始めた。

「まず始めに、春の星空で目立つ『北斗七星』からご紹介します」

「闇はよく嫌われるけど、闇がなければ光は映えないよな」

十夜は腕を組んで壁に凭れ掛かっていた。並べられた椅子に空きはなく、葵と十夜は準備スペースの出口で見ている。十夜の呟きは歩のナレーションに消え、近くにいた僕たちにしか聞こえなかった。

「広い闇の中で無数に散りばめられた発光体・・・自然の芸術だね」

葵は擬似星空に手を伸ばした。その手は必ず星空に届く。僕も準備のときに何度か暗幕に浮かび上がった星に触れた。本当の星には手が届かないから、僕たちが作った星に触れたかった。

「星はさ、誰かの夢かもしれないね。流れ星ってその夢が叶うから流れるのかも」

葵の囁きに頷き、強く輝く北斗七星を見た。北斗七星は別名『杓星』という。七つ星を繋ぐと杓杓のように見えるからだ。

星の泉の中にある杓杓。それは夢を掬っているようで不思議な感じがした。両手いっぱい星が掴めたら。それは叶わぬ夢だからこそ、同じ星である北斗七星に願いを託した。きっと杓杓は夢を掴んでいる。

「夢、か。うん、そうかもしれない。夢だからこんなに綺麗で力強い」

海里は微笑んだ。闇の中で海里の瞳は星に負けないくらい強く、輝いていた。暗闇の中でもわかる瞳。それは記憶が作り出した幻だったが、現実と寸分も変わらない。間違えるはずもない色だった。

少し青みがかった黒い瞳。それはまさに昼と夜の間の海の色に似ていた。

「星は誰かの運命なのかもしれないね」

葵の声に聞こえたが、葵は口を動かしていなかった。視線は星空に向いている。誰が言ったかわからない言葉。それが、強く、深く、痛みを伴って頭に残った。

パチンと、聞き慣れた音が聞こえた気がした。

4 神威 葵 2

歩たちと別れ、午後は昼食を兼ねて屋台を回った。文化祭委員会のときにどんな屋台があるか知っていたが、想像していた以上に種類があった。いろいろな種類を買って、十夜と分け合ったり、クラスに差し入れしたりした。僕のクラスは「楽しんでおいでよ」と笑いながらすぐに追い出した。十夜のクラスの劇もしっかり観劇し、十夜は自分が作った衣装に満足そうに微笑んでいた。

楽しい時間は速く過ぎていく。今はもう、すべては茜色に染まっていっている。廊下も、教室も、十夜も、自分も茜色に塗り替えられていく。あと三十分ほどで、一般参加者の文化祭は終わる。歩たちは、これから天体観測をしようと言っていた覚えがある。

美術室の前を通り過ぎるときに中を覗くと、カーテンの隙間から夕日が木漏れ日のように細い筋を創っていた。それはあと少し時間が過ぎると消えてしまう、限られた芸術で。限定されているから一層輝いて見えるのだとわかっていた。それでも、眼は幻覚を映す。その中で、一つだけ違っているのが。

「あれ、なんで青い鳥は…」

先を歩く十夜は立ち止まった。そして振り返り、数歩戻って美術室を覗いた。教室の中で青だけが鮮やかだった。何の影響も受けずに存在する。

「本当だ…なんでだろ」

「青い鳥だからだよ。葵」

同時に声のした方へ向いた。夕暮れの美術室に他に誰かがいるとは思わなかった。目の前に立っていたのは見たことがない同い年くらいの少年で。

夕焼け色に染まっていなかった。

髪はセピアで瞳は琥珀色で。十夜とは違う種類の美形だった。その中で、瞳の輝きが印象強かった。生命が宿っている、強い瞳が視

線を捉えた。

少年は軽い足取りで近寄った。

「僕は泉里^{せんり}。何故、僕が茜色じゃないのかって顔をしてるね」

微笑した泉里は僕の前に止まり、腕を取った。

触れた泉里の手から伝わる何かに焦点を合わせようとした。十夜に似ている空気。雰囲気とは違う本質を映す気が、十夜と同じモノだと感じる部分があった。自分のこの、人の性質を読み取る能力を特別なモノだと思ったことはない。皆持っている能力だけれど、それを自覚していないだけだと思っている。本能で、人付き合いはできる。

ふと視線を感じて顔を上げると、泉里と目が合った。

「言ったよね？ 『青い鳥だから』だって。君は『葵』で、そこにいるのは『十夜』。さあ、どうすればいい？」

ゆっくりと手を離れた。何故僕達の名前を知っているのか、という疑問はどうでもよかった。

泉里をじっと見て、ゆっくりと目を閉じた。泉里の言っている意味はわかる。視覚は錯覚を起こさせる。視界なんて脳の働き一つでどうしても変わる。幽霊の正体見たり枯れ尾花、ということ。つまりは先入観さえなければいい。夕日に影響されと思うことが今の状態を作っているのだから、何も考えなければいい。

目を開けた時、そこに居たのは十夜だった。原色の十夜が存在した。

ホッと溜め息が出た。難しく考える必要はなかった。僕は『十夜』を知っている。

十夜は僕と泉里の間に立っていて、僕に向かって微笑んだ後、泉里の方へ向いた。

「答えは簡単。互いを認識すればいいんだ」

その答えに満足したように、泉里は頷いた。その顔は心から喜んでいるようだった。その答えが欲しかったのだと暗に示していた。

ふと不思議に思った。認識なんていつもしている。しかし、原色

を保てなかった。

「でも、なんで先刻まで…」

「気付いてなかったから。深層心理だよ。互いを認識していても心の奥深くにあつたら駄目なんだ。無意識は五感を鈍らせるから」

そう言うとき泉里は、右手を天井に向けて指を鳴らした。手品か何かのように、一瞬で全てが茜色に染まった。『認識』していても、もう前の色には戻らなかった。

「『意識』するのには集中力が必要だからね。もう普通の視覚でいいんだ」

脳が作り出した本当の色。それは、泉里が見せてくれた真実だと感じた。

パチン。前に聞いたものと同じ音だった。

カーテンを開けると一面に星が広がっていた。

視界は半月と、空に無数に散りばめられた星と、星のような夜景で占められていた。

窓を開けて、校庭で行なわれている後夜祭を見た。昨日と同様に、歓声が響いている。

「文化祭はもう終わりだね」

ゆっくり後ろから歩いてくる十夜を方へ振り返った。十夜は月光に照らされて、十夜ではないように思えた。月は人を惑わす。そして、それを甘んじて受け入れる自分がいることに失笑した。

「ああ。だけど、本当の終わりではないから」

追い着いた十夜は金平糖を取り出して月に向けて掲げた。同じように金平糖を月に向けた。

「思い出って続きがあるなら残すべきではないんだ。一つ一つは大切だけど、本当に必要なら心に残るはずだから。だから、これはここに置いて行かないか？」

月に映し出された金平糖。鮮やかに、本当の色を出していた。月光が真実を浮き彫りにする。様々な色の金平糖の中で、残ったのは

茜色と黒だった。

「うん、それがいいね。生きている限り、思い出は心に積もるから」
シオルダーバックから本を取り出し、机の上に置いた。その横に、金平糖を包んだ紙を添えた。

使われていない倉庫になっっている教室。いつまで存在するのかわからないけど。

「空の色が揃ったね」

「空？ ああ、夜明けの白、晴天の青、夕暮れの茜、夜の黒ってことか」

前夜祭と同じように空が光った。花火が、空の色を隠していた。

月が、人を惑わす。そして、本能が呼び起こされる。

「そうか…もうすぐ始まるんだね」

呟きは風に溶けた。十夜に声が届かなかったことに安心し、額を左手で押さえた。

チクリと頭が痛む。前頭葉に鋭い痛みを感じるのは覚醒した印だった。証拠として、右手に幾何学模様が浮かび上がる。覚醒の時期は今頃だった、と初めて認識した。押し込められていた記憶が溢れ出す。良いものも、悪いものも、全ての記憶が頭を占めていく。最後に残ったのは一番近くにいた五人の顔で、あの『会議』の記憶だった。一言一句、誰が何を発言したか正確に言える自信がある。その『会議』で決まったことを、今ではなかったことにしたかった。

永遠に続く錯覚してしまうから終わる時に失望する。望んだのは自分のはずなのに、と後悔した。不変なモノなど数少ない。それなのに、『不変なモノ』の中に自分を入れてしまうなんて馬鹿なことをした。

決心が変わる可能性を考慮しなかった。『決心が変わる』ものと出逢うことなんて考えられなかった。今まで、そんなことがなかった。そんなことがあるはずがない、と思っていた。しかし、その『可能性』は限りなくゼロに近くても存在していた。それに、気付け

なかった。

今さらもう止めることはできない。運命の『プログラム』は動きだした。

右手の模様を、左手を乗せて消した。

「怖くないとはいわない。でも今はその時じゃないから・・・誰かがあの人の意思に気付かないと」

蛍の目からは涙が一筋流れた。海里と冥里は前を歩いていて気付いていない。

蛍と僕はあの人に一番近い存在だから、少なからず影響を受ける。蛍と出逢ったのは偶然なんかではない。僕たちに起こる事は全て必然だった。それはプログラムの前兆で。早く、誰かが気が付かないと。自分では何もできないことがわかっていた。

蛍の鎖骨に浮かんだ模様に、見覚えがあつた。僕も同じ模様が出ているはずだ。

「僕たちが覚醒したということは始まりを表しているんだね」

軽い頭痛を感じた。蘇る記憶。そして、葵は今後悔している。

決定したのは随分前のことだった、と思い出した。長い年月の間に何が起るかなんてわからない。そして彼らに出会ってしまった。皆、意思を変えられるなんて思いもしなかった。でも会ってしまった。僕も蛍も、そして葵も。運命は残酷にも突然訪れる。失いたくないのにプログラムは作動しようとしている。

鎖骨に手を当て、模様を消した。

5 由使 浅葱（ユシ アサギ）

新月の夜、風船蔓の中に蛍を入れて堤燈を作るんだ。
すると、きつと光が進むべき方向を照らしてくれるから

丁度風船蔓が成る季節、近くの公園へ来ていた。風が頬に当たる。
優しくすり抜けて行く夜の風は、冷気を含んでいて気持ちいい。新
月の夜、静まった夜の公園は昼間の面影を少しも残してはいなかつ
た。ただ、黒く彩られた景色が広がっている。

歩いていく内に、目の前に小さな光が見えた。ふわふわと何かを
求めて飛んでいる光。それは幻想的で現実味を帯びていない、不思
議な物体に見えた。

光の正体は蛍だった。闇の中に浮かぶ光は神秘的に輝いている。
淡く、消え入りそうな光に心を奪われ、自然と蛍を目で追っていた。
決められた道を行くのもなく、自由に漂う蛍。沢山のモノに縛り
付けられているからこそ、自由を切望していた。その戒めは、自分
に原因があるものが多々あることも理解している。しかし、理解と
納得は別物だった。まだ納得ができていないから、縛られ続けてい
た。

少しすると、蛍は一つの場合から動かなくなった。止まっている
先には風船蔓が浮かび上がっていた。ほんのりと、弱い光で見える
ほどの視界。辺りはそれほど暗いのか、と初めて実感した。暗
いのは恐くない。全てを隠すのなら自分も隠されているはずだから、
と安心する。

ふと、思い出した。それは何処かで聞いた話で。『新月のおまじ
ない』と誰かが言っていた。

導かれるようにして、手は蛍へと伸びて行った。蛍は捕まえられ
ることを少しも恐れず動かない。近くにあった風船蔓を摘み、少し
穴を開けて蛍をそっと中に入れた。蛍はじつとしたまま、ひっそり

と光っていた。一定のリズムを刻みながら、呼吸をするように、心臓が血液を送り出すように。それは生きている証拠に見えた。

よく見ると、ある方角にだけ明かりが届いている。懐中電灯を一直線に当てたように出来た光の筋。光の道、と言っているほどしっかりしたものだった。これがあの、進むべき方向というものかもしれない、と妙な確信があった。

蛍が指し示す先には何があるのかわからない。真っ暗で吸い込まれそうな闇が続いているだけかもしれない。しかし、足は指し示す先に向かって進んだ。本能に従っているかのように、しっかりと。ゆっくりと歩いていった。歩き慣れた、木々に囲まれた遊歩道を、蛍の光のリズムで歩いた。自然とそのリズムは鼓動と重なっていた。珍しく、リズムが安定している。

遊歩道は、夜の闇でいつもと違う感じがした。闇に吞まれた木々は一層影を濃くする。しかし、不安は一切なかった。ここまで闇を切望したのは初めてだった。蛍が導いているという安心感が、浅葱の心を満たしている。

闇を見つめている内に、だんだん心臓が高鳴ってくるのを感じた。だんだん、少しずつ。胸が高鳴る、というのはこういうことか、と実感した。不安とは違う、期待の高鳴り。しかし、まだ確実に期待の鼓動かどうかかわからない。いつもの病気の為か、それとも。

蛍の光が儚く揺れる。心を掻き立てられたように感じ、歩調を速くした。思いを消すように、速く。期待して失望するのはもう嫌だった。初めから期待などしなければ良かったと思うことが多い。

「何故そんなに急いで歩いているの？」

突然後ろから掛かった声に、体が固まった。ゆっくり振り返ったその先にいたのは、色の白い、同い年くらいの少年だった。白い肌が闇の中で浮かんでいる。闇に溶けて薄っすらと見える黒い髪が一層肌を白く見せた。僕に負けない、肌の白さ。手には風船蔓を持っていた。

少年は、風船蔓を持った手を顔の前へとやった。衝撃を受けた。

信じられない、という思いが頭を占める。光で浮かび上がったその顔はよく知っている、忘れられない顔で。少年の黒曜石の瞳が視線を捕らえた。

「どうして・・・」

「覚えてくれていたんだ。おまじない」

につこり笑って僕の持っている風船蔓を指した。

思い出した。このおまじないは少年が教えてくれたものだった。そして少年は。

「睦月・・・」

「このおまじないをしているってことは、迷っているんだね？」

思考を遮るように、睦月は聞いてきた。視線を逸らして頷くと、睦月はゆっくりと近づいてきた。その足取りは軽く、体の重さを感じさせなかった。まるで浮いているように見えて。

幻覚だと思った。あつてはならない幻覚。期待が生んだモノなのだから喜んではいけない。僕を縛っている鎖が睦月だった。縛られ続けることに意味はないと知っているのに、それなのに解こうと努力しない自分がいる。

目の前に立つた睦月は、自分の持っている風船蔓を差し出した。

「あげるよ、これ」

睦月は、差し出された風船蔓を受け取ろうとした僕の手を不意に掴んだ。掴まれた手から伝わる睦月の冷たい体温。体温と言えるのだろうか。氷水に入れたように冷たい手。まるで硝子のようなのだ。振り払うのを躊躇った。儚く、壊れてしまいそうで。

「迷わないで」

真っ直ぐ見つめる睦月に、視線を合わせた。黒曜石の瞳の中は深く、意思を持っていた。わかっていた。睦月が何を言いたいのかを。睦月はこうなる事を望んでいたわけではない。

睦月は微笑み、掴んでいる手に力を込めた。

「蛍は心の中の光。きつと一つのところを指しているから・・・もう本当は決まっているんだよ、何処へ行くべきかなんて。蛍は表面にそ

れを表しただけ。だから見つかるよ、答えは」

ゆっくり手を離し、睦月は闇の中へ戻って行った。あいかわらずの重さを感じさせない足取りでゆっくりと。それ以上言う事はない。それ以上言うと言葉は効力を失う。言いたいこと、伝えたいことだけを言うから、言葉は深く刻み込まれる。

追い駆けたい衝動に駆られた。しかし足は動かなかった。少しも動こうとしない。行くべき場所を知った今、足は忠実に守っていた。間違った方へは進まない。

睦月の行き先はわかっていて。でも、光は逆の方向を指している。当然の結果だった。道は睦月と同じ道へとは続かない。睦月は闇の中へ溶けていった。

二つになった光は、同じ方角を指していた。行く先はわかっている。

答えは一つ。

迷わず歩いた。もう迷う必要なんてない。そしていつの間にか心の中にあつた鎖が解けているのを感じた。幻覚ではなく会えたから、そして少しも睦月は怒ってはいなかったから。もう病気を引き起こしていたモノの大半は消滅していた。残るのは少しの心配だけで。少し進んだ先の木々の間から見えた建物は白っぽいコンクリートでできていた。進むべき道はそこへ続いている。

未来はそこにある。

一つ言えなかったことがある。言わなくて良かったのだと、今はそう確信した。あれはきつと蛍の光が見せた奇跡だろう。睦月が最後に言った言葉が頭を過ぎる。

「きつとまた会えるよ…」

ゆっくりと瞼を上げた。目の前にはいつもの白い天井が広がっていた。白くて、無機質な壁が目にも痛い。病院独特の消毒薬の匂いが鼻を掠めた。

ベッドの上にいた。いつの間に寝ていたのか、わからなかった。

どこからが夢だったのか。あの夢の後だからこそ、いつもと変わらない部屋にガツカリした。重い頭に顔を顰めながら起き上がった時、手に何かを握っているのに気が付いた。

フウセンカズラ。

蛸は逃げてしまっていたが、確かにあった。しっかりと、二つの風船蔓を握っていた。

瞳から突然、涙が出てきた。嬉しくて悲しい、そんな気分が現れた為だった。それ以上に何かがある気がしたが、今はわからなかった。ぎゅっと、風船蔓の茎を持つ手に力を込めた。

現実に戻されるのはつらいけど、夢を見ているばかりではないから。だから前に進むしかない、と教えてくれた睦月。

涙は止まることなく流れ続けた。迷いを全て流してしまうように。終止符を打つように。

「後悔なんてしていない… けど」

睦月の声は悲痛に響いた。今は窓の外からでしか浅葱を見守ることができなかった。まだ時は満ちていない。浅葱が真実を知った時、どうなるかが心配だった。壊れはしないだろうが、閉じこもるかもしれない。そして、心を閉ざしたまま『実行』するだろう。

せつかく今、鎖を振り切ったというのにまた新しく縛られることになる。いや、初めから繋がれていた。運命という名の残酷な『プログラム』に。

6 睦月（ムツキ）と浅葱

水面に映る真実 雫を落として願いを唱えるんだ

水が弾く音と共に現れるから

変わらないその瞳が 美しく輝く

波紋が静まると消えていつてしまう

だから その瞬間まで夢をみせて

気温はこの夏最高だと予報で言っていた。

夏休みに入って一週間が経ち、校内には部活動のために登校した生徒しかいなかった。そんな中、御影と並んで美術室へ向かって歩いていた。

御影の両手にはたくさんの荷物がある。文化祭までに完成させられなかった作品を作るために、退院してからずっと通っている。幼馴染みの御影は、今日は図書室に用があるということで一緒に来たが、荷物を運ぶための口実だということはわかっていた。

睦月も御影も、僕に甘すぎる。

「浅葱、じゃあ二時間後に」

美術室に荷物を置き、御影は図書室へ向かっていった。

夏休みに入るまで神経性の病気で入院していたが、入院していた期間は一年だった。

神経性の病気とは、悩んだり、ショックを受けたりすると鼓動が速まり呼吸が苦しくなる、というもので、まだ完治とは言えないが状態は良くなったため、今は普通に生活をしている。

突然症状が軽くなったのに、医者も家族もただ驚くだけだった。一年で退院するには、初期状態は悪すぎた。なのに、今では病気だった気配さえない。

すぐに退院できたが、神経性のモノはすぐには治らない。そう医者は言っていた。だからこそ、そんな僕を気遣って、家族や幼馴染

みの御影がそばに居てくれた。

美術室は涼しかった。カーテンは影を作り、太陽の光を遮断してくれる。開け放たれた窓からは風が通り抜ける。そんな美術室を肌で、耳で、眼で感じながら制作準備をしていると、ふと、ある音が耳に入ってきた。

さまざまな部活動の声の中で聞こえる音。それは歌だった。ソプラノの声でゆっくりと歌っている。曲風は『星に願いを』に似ていて優しい感じだった。声と曲が合っていて、調和している。

準備の手を止め、まだ聴こえる歌をじっと聴いた。後半に差し掛かった歌。

どこから聞こえるのか。

耳をすませて聴いていると、廊下から聴こえているようだ。音と共に、一瞬映像が過ぎった。それは、一度見たことがあるような風景に見えた。

ふと背中に気配を感じ、振り向いた。

その先には黒髪の。

「睦月……」

呟いた声に反応するかのように微笑んで、睦月は歌い続けた。しばらくの間聴いていると、睦月は途中で歌うのを止めた。ちょうどサビに入る手前だった。

それがわかったのは知っていたからだだった。思い出せないが昔に聞いた歌。睦月の声は前に聞いたものと同じ、優しい声だった。

「浅葱、化学室で待ってる」

そう言った後、教室を出て軽い足取りで走って行った。前と変わらない、浮いたような足取り。真実がはっきりと表されていた。睦月は死んでいる。

その後ろ姿を見て、思い出した。病院の近くの公園で会った、あの時。重なる景色はあの場所だった。まだ縛られてる、と感じる。そして「また会える」という、あの言葉が甦った。

特別棟は静まり返っていた。

通常の授業では使わない、化学室や調理室がある校舎は、部活動でも使用していなかった。夏休みに大抵の文化部は活動しない。静かな校舎は不思議と恐さ感じさせず、安心させるような雰囲気を持っていた。

自然と足の進むまま、科学室へと向かっていた。

廊下を吹き抜ける風は、音となって何かの曲を奏でているように聞こえる。それは、あの歌のように聞こえてきた。

風の曲に耳を傾けながら、化学室のドアを開けた。

「浅葱」

誰かが机に腰掛けていた。逆光で顔は見えなかったが、誰なのかわかった。

「睦月……」

近づいていくにつれ、顔がはつきりと見えてきた。あの、忘れられない顔。忘れたくても忘れられない。

睦月は机に視線を落として、蛇口から落ちる雫でできる波紋を見た。睦月の隣に立ち、同じようにビーカーの中の波紋を見た。

「覚えてる？ 僕が歌っていた歌」

睦月は視線を落としたまま、波紋の中に映る僕に話し掛けた。

「あの『湖の水面に』っていう歌？」

「そう。あれもジnkスの一つだったんだよ。知ってた？」

睦月はにっこり笑って僕の顔を見た。その顔に悪意は感じられず、溜め息をついた。

「……知らなかった。ああ、だから『また会える』ね」

「まあね」

そう答えるなり、すっと立ち上がった睦月は水に触れようとした。それを止めようと手を延ばしかけたが、次の光景を見て少し胸が痛んだ。同時に呼吸も少し荒くなった。

雫が通り抜ける睦月の手。それはこの世にはいない存在の証拠だった。

「なんでそういうことするかなあ」

「仕返し。怒っているんだからね、病気になったこと」

言葉とは反対に、睦月の声は優しくかった。そして変わらない微笑みが浮かんでいる。しかしそれは蛍光灯に照らされて、消えてしまいうだった。闇に溶けてしまうように、曖昧に映る。

「そんなの…仕方がないじゃない。だって睦月は僕の」

「人の心はコップ一杯の水のようだね」

言葉を遮った睦月はそのまま続けた。

「こぼれるように壊れてしまったり、濁って悪くなってしまうたり」
「僕のコップの水はこぼれしまったということ？」

真っ直ぐ見据えた視線の先には安心させる睦月の笑顔があった。

睦月は視線を逸らし、残りの雫を見た。確かめるように、じっと凝視している。

その視線を追うと、また胸が痛んだ。あと何分かで雫は落ちきってしまう。

あの歌では、落ちきってしまったとき。

「こぼれた水は戻らない」

一つ、雫が落ちた。睦月は無表情で、しかし口調ははっきりしていた。

広がる波紋は薄くなっていく。そして、消えた。

「でも…また入れることはできるよね。他の水を」

雫から視線を睦月に向け、はっとした。

その言葉の優しさと、だんだん消えていく睦月。それは一つのことを示していた。

「浅葱、気付いているはずだよ。一度はこぼれた水だけど、今、浅葱の心のコップには水が入っているんだよ。ねえ、誰が分けてくれた？」

また雫が落ちた。その度に薄くなっていく睦月。しかしその顔にはあいかわらず微笑があった。

「父さん、母さん、姉さん…あと御影」

「うん、だからね、悩まなくていいんだよ。僕はもう生きてはいないけど、そばにいるから。皆、助けてくれるから。だから、今度はその水を守るよ」

ゆつくりと、一歩ずつ近寄ってくる。そして雫が落ちきった時、消えた。目の前で、跡形もなく。

睦月のいた場所を見つめたまま、そつと呟いた。

「兄さん…」

頬を撫でる風で目が覚めた。いつのまにか眠ってしまっていたようだ。硬い机の上で寝ていたため、体が痛かった。

ゆつくりと起き上がり、睦月のいた場所を見た。

確かあの辺にいたような。

その場所には花が二本、並んでいた。その花を取り、美術室へと続く廊下を歩いた。

戻る途中、心配して探しに来たのか、不安な表情をした御影と会った。

「浅葱、何してんだ？」

僕を見つけてほつと息を吐いた御影は苦笑を浮かべた。小走りですべてきた御影は、手に持っている花を見て不思議そうな顔をした。

「向日葵とかたばみ？ どうしたんだ、コレ」

「もらったんだよ」

「誰に？ 恋人？」

「なんで恋人…？」

俯いて真剣に考えている御影に、少し脱力しながらも聞いてみた。それを無視し、まだ考え続けていた御影は、しばらくして顔を上げた。

「それとも…まあいいか。向日葵は『あなたを見つめる』で、かたばみは『私はあなたと共に生きる』っていう花言葉があるんだ」

背中を軽く叩いて家に帰ろうと促した御影に、走って隣へ並んだ。自然と笑顔が浮かんでいた。

確かに恋人にあげるような花かも。

「何だ？」

その笑顔が移ったのか、御影も微笑を浮かべて訊いた。それに
つこりと満面の笑顔を作った。

「秘密だよ」

睦月に遮られた言葉をそつと、御影に聞こえないように呟いた。
『だって睦月は僕の兄さんなんだから』

「やらなければならないんだ」

自分に言い聞かせるように、花を握り締めた。

覚醒してしまったのだから、やるべきことは決まっている。睦月
だってそれを望んでいるはずだ。そして、あの人も。自分だって同
意したのに、でもそれを行う事が今では良いとは思えなかった。し
かし、全てを握るのはあの人だから。もう始まっているのだから止
められはしない。ただ、やるべきことをするだけだ。

プログラムは絶対的なモノだから。

7 治賢 御影（ジケン ミカゲ）

冷えた感情を溶かすための方法の一つ

凍りついた心を元に戻すには

宝石を氷と反応させて 空気の中に溶かすんだ

そうすれば 自然に水に還り

自分の心を許す事ができるから

暑さが増してきた八月中旬。

暑さのためか、人通りの少ない道路をあてもなく歩いていた。熱せられたアスファルトの上を歩くと靴から熱気が伝わってくるようで、少し歩調を速める。汗で肌に張り付く服が不快だった。

気温は四十度に近い。重い雲が空を覆っていて息苦しい感じがするのは錯覚ではないだろう。しかし、この季節は嫌いではなかった。汗が、上がる息が、生きていることを実感させる。風は生暖かいが、溜まって濁っているモノが薄れていくような気がした。

「暑いよねー」

突然、後ろから声がしたのに立ち止まった。しかし、自分に掛けられた声ではないと思い、歩き始めた。知っている声ではない。そして、無愛想な自分に声をかける他人なんていない、と長年の経験からわかっていた。

無視して歩いていると、ぐつと後ろに力が掛かった。服を引っ張られている感触がする。少し力を入れれば手は離れるだろうが、あえてそうしなかった。仕方なく振り返ったその先にいたのは同じ年くらいの少年だった。

「無視は酷いなー。久しぶり、御影^{みかげ}」

親しい友人に出会ったかのように笑う少年に見覚えはなかった。不審そうに見ていると、目の前で指を鳴らされた。

パチンツ、とその音で頭の中に重なる顔があった。中学三年のと

きに三ヶ月だけクラスメイトとして居た。

「紗雲さくも…」

「思い出した？」

満面の笑顔を浮かべた紗雲泉。その顔に、脳裏で何かが浮かんで
こようとする。この顔はどこかで見たことがあった。そう、中学三
年より前に。もっと昔に。

どこで。

それを思い出そうとしてじつと見た。鮮明になっていく記憶。押
し込められた記憶の箱が、今開こうとしている。すると突然紗雲は
表情を硬くし、澄んだ声で言った。

「ねえ、なんでそんなに苦しそうな顔をしているの？」

突然の言葉に身を固めた。紗雲は目線を上げ、じつと瞳を覗いて
くる。その瞳を見ていられなくて、思わず逸らしてしまった。見た
ことがある、瞳。知っている、存在。しかし思い出そうとすると目
の前の存在が打ち消す。堂々巡りの思考に頭が痛くなりそうだった。
「・・・苦しそう？」

「そう。なんで？」

視線をアスファルトに落としたまま、少し考えた。そんなことを
言われたのは今まで一度しかなかった。それも同じような瞳で。そ
の答えは未だに出せてはいなかった。

苦しそう。どこが。

「苦しくはないけど」

その答えに紗雲は困ったような顔をした。目はなぜわからないの
？と言っているように見え、少なからず動揺してしまった。答えを
出すのが辛いなんてことは、初めてだった。学校で教えられること
は全て模範解答がある。数学に至っては答えは一つだ。自分の感情
を表すのなんて十文字もあれば十分だった。しかし、今求められて
いるのはもっと次元が違うことだった。自分の心を知るなんて、簡
単にはできない。

紗雲は暫く考えている風で沈黙が続いた。俯いていたが、相変わ

らず手は服を掴んだままだった。じつと待った。今ここで立ち去ってはいけない、と本能に近い何かが働く。そして紗雲は唐突に顔を上げた。変わらない真っ直ぐな瞳を向けて。

「じゃあ、御影はいつから御影でなくなったのかな？」

俺が俺でなくなったのはいつか。

自分でなくなったとはどういうことだろう。昔とは違う自分になっってしまったということだろうか。ふと、いつの間にか真剣になっている自分を笑った。この感じは近い場所にあったモノだった。明らかになっていく、頭に引っ掛かっているコト。

昔とは違う自分。そうだとしても『自分でなくなつて』はいない。「俺が俺である限り、俺は俺でしかないだろ？ 別に他になろうとは思わないし、思ったこともない」

「うん・・・だけどね、見かけとかじゃなくて中の方は？ 僕が言ったのは中の方。御影の心は苦しんでいて冷たい。御影でなくなつてる」

向けられる瞳からは心が見透かされている感じがする。

澄んだ瞳。濁りが無く、汚れていない瞳。世の中に染まっていな色。それを持つことができるのは限られた人間だけだ。そして、今まで二人だけそういう人間に会ったことがある。

何故か怒りが込み上げてきて、責めたくなつた。憧れていたモノを持つている紗雲。しかし、口から声は出なかった。責める権利なんて誰も持っていない。

紗雲は服から手を離し、力無く落としている俺の手を取った。その手は冷たく、体に染みていった。脳裏には鮮明になっていく、形を成していなかったモノ。この温度が呼び覚ます、記憶。

「これ、あげる」

につこりと笑って手を離した。離れた手の中に残っていたのは小さな水晶玉で。大きさはだいたい飴玉くらいだろう。

透明な宝石は、手の中でひっそりと光っていた。

「水晶には浄化作用があるんだよ。悪いところを全部取ってくれる。」

だからきつと溶けるよ、心の氷」

笑みを浮かべた紗雲の表情が、二重に見えた。

それが錯覚なのかどうかを確かめるように、水晶玉を覗き込んだ。水晶玉には何も映っていないくて、浄化作用というのがなんとなくわかった。澄みきっていて、心を癒す。

暫く瞳を閉じていると、ふと、手に何かが触れた気がした。ゆっくりと目を開けたが、すでに無くなってしまっていた。冷たい感触だけが残る。

雨だ。ゆつくりと、一つ一つ雫となって降ってくる。

「あつ雨だ」

紗雲の声で顔を上げた。そして、息が詰まった。

頭の中で、パチンと音が聞こえた。

「泉里?!」

思わずその名が口から出た。そう、彼は泉里だ。紗雲泉ではなく。本当の名前は。

「泉里・・・なんで」

「御影が苦しんでいるから。なぜ感情を隠そうとするの? 人はいつだって自分に正直じゃないと駄目なんだよ、壊れてしまうから」
相変わらず優しい声で話す泉里に、少しホッとした。

今会えたことが嬉しかった。自分でもわかるくらい、心が穏やかになった。引つ掛かっていたモノが解け、透明になっていく。

「ああ、わかつている。いや、わかつていた、だな。少し自暴自棄になっただけだ」

「やっと笑った。忘れていたのかと思った、笑い方」

その言葉で初めて気付いた。

俺は今、笑っている。

何年ぶりだろう、本当に笑ったのは。多分、一年ぶりだ。泉里の笑いが移ったのか、表情は戻せなかった。いつもの無表情には。

「御影、自分を許さなきゃ駄目だよ。君が悪いんじゃない。君がやるべきことをやるまで。それまで僕はいるから」

優しく降る雨の中に溶ける言葉。それはきっと本当だ。きつといてくれる。一人でなければ強くなれる。それに、一番辛い役の浅葱がいる。

「まあ、この役は俺しかできないからな。夜宵と蛭はどうなってる？」

「覚醒したよ。もうすぐ…だね」

「そうか…心配してくれてありがとう」

こんなにも素直に言葉が出てくるとは正直思わなかった。最後の方は呟きだったが、泉里に聞こえていたようだった。自分が言った言葉に驚いているのに対し、泉里は微笑を返したただけだった。おおよそ、「御影は元から素直なんだよ」とでも思っているのだろう。

だからこそ、泉里には素直になれた。今までも、これからも。

「じゃあね、御影」

「うん…じゃあ」

まるで学校の帰りの別れのような挨拶だった。また明日会えるよ、うな、そんな感じのする挨拶。最後にお互いに手を出して握手を交わした。泉里の手は冷たかったが、温かさが体を包んだ。内面的な温かさが。

雨はまだ降っていた。その中で泉里はゆっくりと消えていった。例えるなら、氷が水に還るように。

手の中では水晶が淡く、輝いていた。

「もう始まっているのか…それともまだ準備期間、いや猶予期間なのか？」

名刺に似た銀色のカードをポケットから取り出した。先程まで何も入ってなかったはずのポケットから出てきたことに少しも驚かなかった。ただ納得するだけで。カード一枚で終わってしまうプロگرام。作動させるのは俺だが、実行する意思はあの人のものだ。全員で決めたはずなのに、あの時は同意したのに今では反対する気持ちが強い。それは自分だけだとは思わなかった。皆が、あの人が反

対したらいつでも止めることができる準備をしようと決心した。
プログラムはカード一つで変わる。

「時間です」

葵の前にどこからともなく現れたのは浅葱だった。無表情を作ろうと努力しているが辛そうに見える。何が辛いのか誰にもわからない。正確な答えなど出せるはずもなかった。

「浅葱……。そっか、そうだよな」

葵が何を言っているのか十夜にはわからなかった。しかし葵は浅葱が現れた意味を理解し、それに従おうとしていた。十夜にわかることはただ一つ。葵はそれを望んでいないということだった。

浅葱の出した手を葵が取るうとした。

「葵！ それでいいのか！？」

葵は振り返った。十夜の予想は当たっていた。葵は今まで見たことのない、悲痛の表情を浮かべていた。拒否、そして絶望。悔やんでいるのがわかるが、葵はそれに反して浅葱の方へと向き直った。

浅葱は葵の手を取った。倒れ込む葵。葵が意識を失ったのがすぐにわかった。体重が全て浅葱にかかる。決して葵は軽くはないが、浅葱は重さを感じないのか、軽々と抱えていた。行動を起こした浅葱本人はもう表情を作ろうとせず、ただ泣いていた。

「あなたが望んだことだ……」

二人は消えた。十夜だけがその場で立ち尽くしていた。

「もうすぐ空が無くなるよ」

「神が眠りにつくから」

夢だと思える瞬間が欲しくて、何時だって迷ってた。望んだのはあの人。叶えるのは僕。あの人が望んだことだと、そう思えば救わ

れると思ってた。しかし真実は違って、みんな賛成したことだったのに。単調な世の中は知らない、そう思っていたのに。唯一の誤算は彼らに出会ったことだ。従者が、そしてあの人までが彼らに影響された。偶然と呼ぶには重すぎる。そう、彼らが司の長だということもあるのだからこれは、運命。

望んだのは僕ら。叶えるのは僕。僕にはプログラムを止めることなどできない。

8 プログラム関係者と創司十夜

走り続けていた。

汗で髪が肌に張り付き、息も切れてきていた。まるで『走れメロス』のようだ。内容もそれほど違ってはいないような気がする。ただ、はつきり違うのは風景だった。

人工的な白い壁がどこまでも続いていく廊下を走って何分になるだろう。入ってから続いている一本道。ただただ、白い壁だけが視界を占める。

染み一つない白。境界線さえわからなくなるような白さに嫌気がさしながらも走った。どんなに辛くとも、今は走らなければならぬ。葵が消えた時、はつきりとこの場所が頭に浮かんだ。この場所で合っている、という自信があった。この風景を伝えたのは葵。そして今、葵は後悔していて望んでいないことを実行されようとしている。その理由をまだ知らない。本人に直接訊けばいいことだ。

角を曲がると、数十メートル先に壁が現れた。周りと同じ色で同化してしまっているが確かに前方を塞いでいた。硬質の壁に見える。迷うことなく壁に向かって走った。道は続いているのだから、進むしかない。

「葵！」

思わず叫んだ。

何も衝撃はなく、壁のようなものを通り抜けた先にあったのはコードだった。視界は赤、青、緑など様々な色、太さのコードに埋め尽くされていた。

それを掻き分けて進んだ先に、少し開けた空間があった。十畳ほどの広さで、機械類の集合体と言えるようなコンピューターが真ん中に設置されている。周りやはりコードで埋め尽くされていた。その中に埋もれていたのは葵だった。

「間に合ったみたいだね。いや、少し遅かったかもしれない」

葵の前に立ち、微笑を浮かべているのは以前葵を攫って行った少年、浅葱だった。

「もう歯車はそろったんだよ」

意味有り気に視線を葵の横に向けた浅葱を見て、視線を動かした。そして、思わず息を飲んだ。

そこに居たのは葵と同じように埋もれている、葵と同じ顔の蛭と夜宵だった。

「歯車って一体・・・」

「彼らは歯車なんだ。葵は世界を動かしている神でね。他の二人は歯車だよ。神を、世界を動かす為のね」

浅葱はにつこりと楽しそうに笑いながらコードを手に絡ませた。

前に会った時の表情とは正反対の喜び溢れる浅葱の顔。それは何かの役を演じているようだった。伝わる雰囲気は変わっていない、表面だけの演技で。浅葱はまだ迷っている。

「蛭！」

「夜宵！」

後ろに現れた海里と冥里は同時に叫んだ。無意識の内に高まっていく感覚。

左腕が熱かった。チリチリと、鈍く痛む。心配している二人の気持が同調する。

「君達も来たんだ？ 海里、冥里。…もう遅いよ。神はもう眠りに就いてしまった。従者も同時に眠りに就いた。君たちが長であつてもプログラムには関係ないんだよ」

長。その単語に腕がまた痛んだ。俺たちが長。腕の痛みが何かを伝える。

目覚める。君が選ばれた。

- ああ、わかってる。

浅葱は残酷に、冷淡に笑っている。そんな浅葱を一瞥し、葵のいる方へと走って行った。頭はすっかりしている。痛みも消えた。今、この状況が理解できた。

今は浅葱を救えない。優先順位は決まっていた。みんなを助けたのなら、神の本当の気持ちを伝えなければならぬ。

神、葵はこの結末を望んではいないことを。

葵はコードに埋もれる、というより溶け込んでしまっているようだった。ゲル状になった皮膚に入り込むコード。点滴とは違い、どこから皮膚なのかわからない。少しずつ、侵食していく人工物。すべてが異常だった。すべてが、終末を表していた。

「葵は神なんだ。君たちとは違う」

浅葱は絡まったコードを引っ張り、助け出そうとする俺たちを見て冷笑した。浅葱の、コードを弄ぶ姿はまるで操り人形の糸を操っているかのように見えた。道化師のようで。操られているのは葵たちなのか。それとも浅葱なのか。

「肩書きなんてどうだっていい。そんなもの関係ない。始まりはゼロからなんだから、本質を知るのなんてそれからでいい」

「どんなに似ていようが、間違わない。本質は個々で違っているから」

「歯車なんかじゃないんだ」

海里、冥里も手を動かしながら続いて言った。表情は優しく、視線は目の前で眠っている従者に向けていた。怒りは今必要ない。望むのは目覚め。絡まり合うコードは自然と解けていった。俺たちは知っている。このコードは、葵たちを拘束できるものではない。

コードに溶け込む葵は言葉に反応して少し動いた。それを見逃すはずもなく、最後に伝えるべき言葉を発した。それは決定的な戒めを解く言葉で。俺の本音で。

「早く帰っておいでよ。世界なんて滅びた方がいい。だけど君がソレを望んでいるとは思えない。君はどうしたい？」

右腕で葵の体を支えた。コードはまだ葵を掴んで離さない。まだ、葵の意識が弱すぎる。

葵はゆっくりと右手を上げ、俺の服を掴んだ。右手に模様が浮かび上がっている。

「まだ：まだ起きていたい」

「そんな…！ 今更！」

弱々しく発した言葉に重なるように浅葱は叫んだ。否定の声。浅葱はコードを引きちぎり、葵の方へ歩いていった。葵は一瞬痛さでうめいたが、すぐに自分からコードを引っ張った。拘束はもう解けていた。

浅葱の今までの余裕の持った表情は消え、困惑した顔で葵の前へ立った。怒りを押し殺しているようで、手が震えていた。

「何故・・・！」

「僕たちの世界が、変わったから」

薄く目を開け、優しく微笑む葵に浅葱は脱力し、その場に座り込んだ。もう演技はいらない。神がそれを選んだ。

でも、まだ何も終わらない。

葵はゆっくり息を吸い、弱い呼吸と共に囁いた。

「蚩、夜宵、起きて」

葵が言ったと同時にコードは蚩達から離れた。白い肌は浮き上がり、本来の姿に戻った。人形は今、人間へと覚醒した。目がゆっくりと開く。呼吸の音が微かに聞こえた。

葵はそれを確認し、支えられていた体を起こして浅葱の前に座った。視線を合かし、ゆっくりと笑みを作った。葵が得意とする笑顔は。この選択が間違っではないことを示していた。

「君を待っている人がいるよ、浅葱」

「プログラムは停止した」

奥の方から聞こえた声に、肩が震えた。彼はプログラムに関係ないと思っていた。浅葱も呆然としている。

絡まり合うコードを掻き分けて現れたのはクラスメイトだった。

「御影・・・」

座り込んだまま、浅葱は御影を驚いた表情で見上げて呟いた。まさかこんな身近に関係者がいるとは思わなかった。葵のクラスメイトの浅葱が関係者だったことから、可能性としては睦月を予想し

ていた。双子なのだから使命も同じだと。しかし、睦月は死んだ。それは可能性を否定するのに十分だった。『プログラム関係者』はある年齢』まで死なない。なら、睦月の役目は。

御影は右手に持つカードを軽く上げて、優しく笑った。

「もう終わったんだ。これは神が望んだことなんだから」

「でも睦月が・・・」

「会わせてあげようか？」

ふらつきながらも葵は立ち上がった。そして軽い、流れるような声で言った。昔、遠い昔に聞いたことがある声。

本能で知っている。葵が、神だから。

太陽が地平線に浮かび 今消えようとしている

一番星が小さく淡く輝いている

夜を避けるように飛び立つ鳥達

一緒にいれば夜の暗さに心は和むから

美しく咲く始まりの花 儚げに散る残り火

さながら空気のように思えた。

「ジンクス・・・」

「神が創った言葉だよ」

上から降ってきた声に浅葱は顔を上げた。そこにいたのは浅葱に似た少年、睦月だった。

地面からメートルほど浮いた所で止まっている睦月は夜宵、蜚、葵と順に見て、最後に浅葱を見た。

「睦月も関係者・・・？」

「賢者だよ。だから僕はここにいる。賢者は世界の安定とプログラム作成を」

パチンツ、と指を鳴らして睦月は着地した。足音が立たなかったが、質量を感じさせた。

指を鳴らす音。それは何度か頭の中で聞こえていた。懐かしく感

じる。それは俺が長だからで。

この音は、俺たちの音だ。

「従者は星を見て管理を」

蛍は自分の力でゆつくりと立ち上がり、葵の方へと歩み寄った。蛍と夜宵が地学部という星を通じて出逢ったのは偶然なんかではなく。

「使徒は全てを見守り最後まで神を護り続ける」

夜宵も立ち上がり、葵に近寄った。使徒、浅葱は自分の意思ではなく、皆の代表で。浅葱に拒否権はなかったのだから、仕方ない。

「神は絶対的なモノとして全ての統制を」

御影は言い切った後、カードを俺に向かって投げた。

受け取って葵を見たが、葵はただ優しく笑うだけだった。もう必要がなくなったプログラム。それは禍禍しいものではなく、神聖なモノに見えた。それは、ずっと昔に彼らが望んだモノだった。いつか、世界を終わらせるために。

「神は…僕を見放したのだと思ってた…」

「睦月が死んだから？ でもシンクスを残してくれた」

御影は葵に苦笑した。御影もシンクスを創ったのが葵だとは知らなかったようだった。だからこそ、シンクスが起こす奇跡を知らなかった。全て、覚醒と同時にわかる。睦月は生きている。賢者としての本能でわかったはずだ。

しかし、御影が浅葱と違っていたのは気付いた事だった。睦月がこの世にいらなくなった意味を。

「神が…望むモノは？」

浅葱は少し震えながらも葵に手を伸ばした。答えを知るのを怖がっていた。答えを知りたいが、知った後で後悔するのは嫌で。もう傷つきたくないという気持ちを感じた。

葵はその手を取り、最後の一節を紡いだ。

「今が今であることを」

従者二人は葵の横に挟むように立ち、笑った。

「だねっ。現状維持ってことで」

「望むモノはそれだけだから」

蛸、夜宵は前に立つ睦月、御影に向かって右手に拳を作って突き出した。睦月は微笑んで、御影は苦笑してそれに答えた。

拳が軽く重なった。

「睦月は仮死状態だったんだ。理由は簡単、賢者は裏で動く仕事があるからね」

賢者が二人である理由はそこにあった。従者が二人いるのは神を補佐する者に偏りがでないため。使徒は見守るだけで、神を護るためにいるから一人でなければならぬ。

そして、浅葱の言っていた長というのは。

「お疲れ様、歩、泉里。有難う」

葵の感謝の言葉に、いつのまにいたのか、気配を消して背後に立っている二人は答えた。

歩と泉里。文化祭で出逢った二人。そして、長。すべて、理解できた。

「これが私の役目ですから」

「良かったです。まだ、あなたたちと生きていられて」

9 紗雲泉里（サクモ センリ）

突然僕たちが現れたことに対して、誰も驚かなかった。

この世界は、神を頂点に世界を統べる者がいる。神と共に世界の存続と崩壊を決定することができる従者、使徒、賢者の五人の『プログラム関係者』の下、枝分かれした『司』がある。字のごとく『司る者』で、それぞれ『火』『水』など自然のものや、僕のように『心』、歩のように『時間』なんてものもある。

その『司』のトップである『長』は輪廻転生を繰り返し、十七歳になる年で覚醒する。三十歳になるまでに死に、また生まれ変わる。その『司の運命』の例外で、僕と歩だけは前世の記憶を持っていた。僕は輪廻転生を繰り返すが、歩は死なない。

葵は巨大スクリーンの前に立って、キーボードで何か入力していた。

「『プログラム関係者』は生まれ変わっても必ず近くにいるんだよ。離れて暮らすことができない。でも覚醒していないからその存在を知ることができないんだけどね。覚醒するのはちょうど今の時期。十七になる年なんだ。だから同学年になる可能性が高い」

葵は誰に向けてでもなく説明した。覚醒しても、知らないことは多い。神だけが知っていること、プログラム関係者が知っていることなど、そのレベルは違う。プログラム関係者が生まれ変わっても近くにいることは知っていたが、こんなに近くにいるとは思わなかった。近すぎて、盲点だった。

「前世の神の指令で、歩と僕は二年前から関係者を探していたんです」

二年前の短期の帰国には意味があった。関係者に出逢わなければならなかった。二年前に御影を見つけ、やっと今年で神を見つけた。でも、神を見つけたときは遅すぎて。

もう、世界が、動きだしていた。

「司の長は稀に交代するんだ。今回『創造』、『光』、『闇』の長が交代して、新たに輪廻転生することになったわけだ。まだ他にもいるかもしれないけど」

御影は金色のカードを取り出し、葵に向かって投げた。それは放物線を描いて、葵は振り返らずに受け取った。金色のカード。プログラムと対になるものだと言ったことがある。

「十夜が創造、海里が光、冥里が闇の長なんて、プログラムを阻止しようとしてるとしか思えないよね」

蚩は十夜の左腕を取った。黒い服の袖を捲くった十夜の腕には刻印があった。長の印。それはただの紅い痣のように見えるがわかる人にはわかる印だった。痣の中からうつすらと浮き出ている模様。創造の長ということもあり、模様は複雑なモノだった。手の平に出ている冥里の闇、海里の光はすぐに見当がつく形になっている。

蚩は海里、冥里の方へと向き直り、十夜の腕を離した。十夜は袖を直し、軽く腕を上げて指を鳴らした。

パチンという音はこの場にいる者には聞き慣れたもので。その音の関係性を示す。

「もう、僕たちは世界を護るしかないんだ。それを、選んだから」それぞれ体のどこかに浮かんた紋様を押さえていた。僕の場合は胸の間で。遠い昔に感じた痛みが蘇った気がした。

司の長になることは選べなかったけど、選ばれたんだから。

世界が神の、そして僕たちの意志とは関係なく終りを迎えるまで。

葵は視線をキーボードから放し、振り返って笑った。真っ黒の画面を背にした葵は確かなカリスマを伴っていて。生まれたときから運命は決まっていた。

「空はまだ青いから」

次の瞬間現れたのは画面いっぱい青空だった。

鮮やかな青はまだ空を覆っていた。

数時間後：浅葱と御影（前書き）

「パートナー」については、『世界の関係者たち』参照。
（『関係者』に必ずいる相方。恋人より家族に近い。出逢っていて
もわからないことが多い。「パートナー？」「だよね」と、確かめ
ないと成立しない。）

数時間後：浅葱と御影

「まさか俺だったとはな」

呆れたように言う御影に、泣きそうになった。

『プログラム』が中止され、皆が去ったコンピューターの前で、御影と二人でいた。睦月は仮死状態だった体に戻り、リハビリのため、葵と別の部屋へ入っている。

そういえば、睦月の遺体は見付からなかったため、火葬されていなかった。ここに保存されていたのか。

御影はキーボードが置いてある机に軽く腰掛け、両手を机の端に引っ掛けていた。

その正面に立って、目を逸らさなかった。

二人きりが嬉しいはずなのに、御影の態度に悲しくなった。

「睦月が良かった？」

「じゃなくて。浅葱は睦月とパートナーだと思ってた」

即座に否定する御影に安心すると同時に、驚いた。

まさかそんな風に思っていたとは。

僕は、睦月が御影のパートナーだと思っていた。あの仲の良さは特別なものだ、そう思っていた。

「御影と睦月の方が…」

「俺と睦月は、浅葱を守りたかったからな。あと、同じ賢者っていう仲間意識が強かったし」

確かに、従者二人も仲が良かった。パートナーを彷彿させる仲。それは同じ役目を担う者同士だからか。

従者二人もパートナーは別にいた。

「じゃあ、本当に僕で良いんだ…」

「初めから、お前は特別だったよ」

優しい笑みを浮かべた御影に、顔が熱くなった。

これは、パートナーだから向けられる笑顔なんだ。そう自覚したら、照れてしまう。

「初めて…賢者になったときから？」

「いや。その前に、幼なじみになったときから」

御影が賢者になったとき、僕と睦月と御影は幼なじみだった。近所に住む同じ歳の子。その関係は、僕と睦月の覚醒で変わるはずだった。

しかし、御影は賢者選ばれていて。プログラム関係者になった。そのときから、生まれ変わってもずっと幼なじみだった。

「浅葱は？ どう思っていたんだ？」

「僕は…意識しないようにしてた。御影と睦月はただの幼なじみで、プログラム関係者なんだって。勘違いしてはいけないって」

特別だなんて思っではいけない。そう思っていた。僕が『使徒』だから、可哀相だと思っっているんだ。あの優しさは同情なんだ。

そう思い込もうとした。同情でも、嬉しかったから。

「御影がパートナー…で、良いんだよね」

「違うと思いたいか？ でも残念。もう遠慮しないからな」

嬉しそうに笑う御影に、胸が一杯になった。

こんな気持ち初めてで。これが魂の片割れと言われるパートナーか。

パートナーだと自覚してから、気持ちが溢れてくる。

意識しないまま、体は前に飛び出していた。

「御影！ みかげ、ミカゲ…！」

勢いよく抱き着くと、仰け反りながらも受け止めてくれた。

この体温は。これからは僕のものだ。

この優しさは。僕だけに向けられるものだ。

「あ、やっぱり君たちはパートナーだったんだね」

横から聞こえた声に、首だけを動かした。

睦月は腕を上には伸ばしながら、しっかりと足取りで近付いて

きた。

「やつぱりって…」

「今世で、僕と浅葱は双子だったからね。じゃあ、浅葱のパートナーは御影かなって」

「睦月と御影じゃなく？」

「僕たちは浅葱を中心にしていたから」

睦月は背中に抱き着いてきた。間に挟まれて苦しい。でも、心地好かった。これは、昔からの距離だ。ずっと同じだった、幼なじみという関係。

それが、今世で変化した。

「良かったよ。君たちがパートナーで。他の人に浅葱は任せたくないからね」

「確かに。浅葱のパートナーが自分と睦月以外だったら嫌だな」

賢者二人は、クスクスと内緒話をするように声を潜めて笑った。間にいる僕は、何か攪ったいんですけど。

身内最良な二人に、返す言葉が見つからなかった。

「睦月はどうするんだ？」

「まだ体が本調子じゃないからね。葵と一緒にいるよ」

睦月はあっさりと離れて、僕の背中を押した。

「君たちはパートナーを満喫してね。もう両親の記憶も変わってるから、二人暮らしするのにちょうど良いしね」

「…睦月も一緒に良い」

思った以上に情けない声が出た。同情を引きたいわけじゃないのに。

ただの我が儘なのはわかっている。睦月はまだパートナーが成立していないのに、一緒にいてほしいなんて。

新婚家庭に居候するようなものだ。気まづくはならないだろうけど、居心地は悪いだろう。

予想に反して、睦月ははにかんだ。

「ありがと。まあ、葵のところでパートナーを見つけて、君たちの

ところに行こうとは思ってただけだね」

「ああ、『長の挨拶』か」

「そう。今世では出会えるはずだからね」

賢者二人は大人の笑みを浮かべた。

長の挨拶。長は覚醒した後、一年以内に葵に会いに行くことになっている。強制ではないけど、習慣化していた。

葵の側にいれば、多くの長に出会うことができる。きっと、その中に睦月のパートナーもいるだろう。

今だからこそ、迷わずにパートナーだと確信できるだろう。

「僕たちはずっと一緒だよ」

睦月の澄んだ声に、泣きそうになった。

御影とパートナーになっても、睦月との関係は変わらない。今世では双子になっただけ、切れない糸で繋がっている。

今までも、これから。

僕たちは近い関係であり続ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6439e/>

ミッシング・リンク 【アナザーストーリー】

2011年3月19日21時25分発行